

三国志人物繪卷

画 劉生展

企画編集 殷占堂



MPC

三國志 人物繪卷

画 劉生展

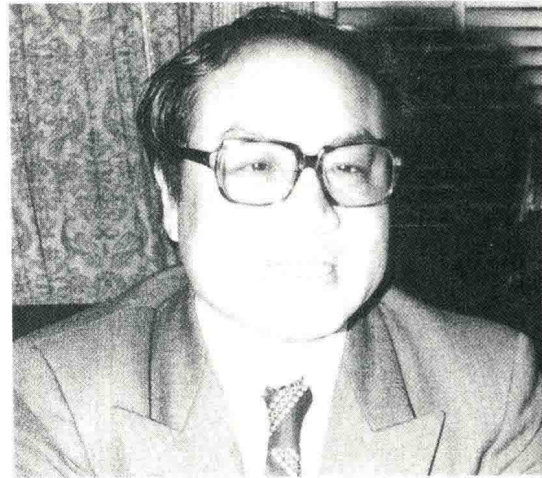
企画編集 殷占堂

MPC



劉生展(りゅう・せいてん)

1938年10月 中国内蒙古自治区豊鎮生まれ。
幼少より中国画を学ぶ。
現在中国美術家協会会員
張家口地区美術家協会名誉主席
河北省第六回人民代表大会代表
張北県文化館副館長
出版作品
年画・中国画 90 余点
絵本 6 冊
美術雑誌、新聞で発表作品千余点
『民族英雄岳飛』年画販売数 200 万点余
水墨画『馬』第 25 回アジア国際公募展入選
『馬を描く』『羊を描く』美術出版社刊



殷占堂(いん・せんどう)

1944 年 中国河北省張家口地区生まれ。
1963 年 張家口師範学校中文系卒
1986 年 来日
愛媛県西条市と新潟県で写真展開催
写真作品：京都市長賞入賞
漫画脚本『仙丹』講談社佳作賞
水墨画『福寿』第 25 回アジア国際展入賞
『馬を描く』『羊を描く』共著、美術出版社刊
現 在：中国華僑写真協会会員
中国作家協会河北分会会員
日本芸術写真作家協会委員
河北テレビ局国際部ディレクター

三国志人物絵巻

1991 年 4 月 6 日 第 1 刷発行

著 者 劉 生 展
企画編集 殷 占 堂
発 行 者 後藤 文彦
印刷製本 壮光舎印刷株式会社

発 行 所 **MPC**
株式会社エム・ピー・シー
東京都千代田区内神田1-10-2三満ビル 〒101
電話 03-3291-4537 FAX: 03-3291-4547

乱丁・落丁はお取り替え致します

© 1991 ISBN 4-87197-116-3 C 3070

目 次

本書の刊行に寄せて	6
三国志人物絵巻	9
黄巾起義(黄巾 義に起つ)	10
桃園結義(桃園に義を結ぶ)	12
劉備(りゅうび)	14
関羽(かんう)	15
張飛(ちようひ)	16
張飛怒鞭督郵(張飛 怒って督郵を鞭つ)	17
曹操(そうそう)	18
孟徳献刀(孟徳 刀を献ず)	19
顔良(がんりよう)と文醜(ぶんしゅう)	20
袁紹(えんしょう)	21
温酒斬華雄(温酒に華雄を斬る)	22
三英戦呂布(三たりの英 呂布と戦う)	24
貂蟬(ちょうせん)	26
呂布(りよふ)	27
鳳儀亭(ほうぎてい)	28
許褚(きょちょ)と典韋(てんい)	30
三讓徐州(三たび徐州を讓る)	31
華佗(かた)	32
郭嘉(かくか)	33
温侯神射(温侯 神射す)	34
煮酒論英雄(酒を煮て英雄を論ず)	36
千里走単騎(千里を単騎で走る)	38
古城会(古城に会す)	39
劫烏巢孟徳焼糧(烏巢を劫い孟徳 糧を焼く)	40
蔡夫人隔屏听密語(蔡夫人屏を隔てて密語を听う)	42
徐庶進曹營(徐庶 曹營に進む)	43
三顧茅廬(三たび茅廬を顧みる)	44
諸葛亮孔明(しょかつりよう こうめい)	46
天下三分(てんかさんぶん)の計(けい)	47
趙雲子龍(ちよううん・しりよう)・単騎救英主(単騎で英主を救う)	48
張飛大鬧長坂橋(張飛大いに長坂橋を鬧わす)	50
諸葛亮舌戦群儒(諸葛亮 群儒と舌戦す)	51
周瑜(しゅうゆ)	52
二喬(にきよう)	53
孫権(そんけん)	54
蔣幹中計(蔣幹 計に中る)	55
草船借箭(草船で箭を借りる)	56

周瑜打黄盖(周瑜 こうがい 黄盖を打つ)	58
曹操賦詩(曹操 詩を賦す)	60
龐統(ほうとう)	62
孔明呼風(孔明 風を呼ぶ)	63
赤壁の戦い	65
老将黄忠(こうちゅう)	66
華容道(かようどう)	67
三気周公瑾(三たび周 しゅうこうきん 公瑾を気せしむ)	68
曹操夢中(曹操 夢の中)	70
曹孟徳割髪代首(曹孟徳 髪を割りて首に代える)	72
曹操割鬚脱袍(曹操 鬚を割りて袍を脱ぐ)	74
張松(ちょうしょう)	75
張松舌戦楊修(張 ちょうしょう 松 ようしゅう 楊修と舌戦す)	76
馬超(ばちょう)	77
張飛夜戦馬超(張飛 馬超と夜戦す)	78
孫尚香投江(孫 そんしょうこう 尚香 江に投ず)	80
單刀赴会(單刀で会に赴く)	81
張遼威鎮逍遙津(張遼の威 しょうようづ 逍遙津を鎮める)	82
甘寧百騎劫魏營(甘寧 かんねい 百騎で魏營を劫う)	83
張飛智取瓦口隘(張飛 がこうあい 瓦口隘を智取す)	84
蔡琰(さいえん)	85
刮骨掠毒(骨を刮り毒を掠める)	86
曹植賦詩(曹植 詩を賦す)	87
陸遜火攻破連營(陸遜 火攻めで連營を破る)	88
孔明七擒孟獲(孔明 七たび孟獲を擒える)	89
司馬懿仲達(しばい・ちゅうたつ)	90
孔明計収姜維(孔明計りて姜維を収める)	91
空城(くうじょう)の計	92
揮淚斬馬謖(涙を揮って馬謖を斬る)	93
奔劍閣張郃亡身(劍閣に奔り張 ちようこう 郃身を亡す)	94
孔明坐車(孔明車に坐す)	95
黄鶴樓(こうかくろう)	96
関雲長夜読春秋(関雲長 夜に春秋を読む)	98
年画作品集	99
三国志と京劇	110
三国志資料	113
前出師の表	114
風雨竹	124
あとがき	126

三國志
人物繪卷

三國志 人物繪卷

画 劉生展

企画編集 殷占堂

MPC

目 次

本書の刊行に寄せて	6
三国志人物絵巻	9
黄巾起義(黄巾 義に起つ)	10
桃園結義(桃園に義を結ぶ)	12
劉備(りゅうび)	14
関羽(かんう)	15
張飛(ちようひ)	16
張飛怒鞭督郵(張飛 怒って督郵を鞭つ)	17
曹操(そうそう)	18
孟德献刀(孟德 刀を献ず)	19
顔良(がんりょう)と文醜(ぶんしゅう)	20
袁紹(えんしょう)	21
温酒斬華雄(温酒に華雄を斬る)	22
三英戦呂布(三たりの英 呂布と戦う)	24
貂蟬(ちようせん)	26
呂布(りよふ)	27
鳳儀亭(ほうぎてい)	28
許褚(きよちょ)と典韋(てんい)	30
三讓徐州(三たび徐州を讓る)	31
華佗(かた)	32
郭嘉(かくか)	33
温侯神射(温侯 神射す)	34
煮酒論英雄(酒を煮て英雄を論ず)	36
千里走単騎(千里を単騎で走る)	38
古城会(古城に会す)	39
劫烏巢孟德燒糧(烏巢を劫い孟德 糧を焼く)	40
蔡夫人隔屏听密語(蔡夫人屏を隔てて密語を听う)	42
徐庶進曹營(徐庶 曹營に進む)	43
三顧茅廬(三たび茅廬を顧みる)	44
諸葛亮孔明(しょかつりょう こうめい)	46
天下三分(てんかさんぶん)の計(けい)	47
趙雲子龍(ちよううん・しりょう)・単騎救英主(単騎で英主を救う)	48
張飛大鬧長坂橋(張飛大いに長坂橋を鬧わす)	50
諸葛亮舌戦群儒(諸葛亮 群儒と舌戦す)	51
周瑜(しゅうゆ)	52
二喬(にきょう)	53
孫權(そんけん)	54
蔣幹中計(蔣幹 計に中る)	55
草船借箭(草船で箭を借りる)	56

周瑜打黄蓋(周瑜 こうがい 黄蓋を打つ)	58
曹操賦詩(曹操 詩を賦す)	60
龐統(ほうとう)	62
孔明呼風(孔明 風を呼ぶ)	63
赤壁の戦い	65
老将黄忠(こうちゅう)	66
華容道(かようどう)	67
三氣周公瑾(三たび周 しゅうこうきん 公瑾を気せしむ)	68
曹操夢中(曹操 夢の中)	70
曹孟徳割髪代首(曹孟徳 髪を割りて首に代える)	72
曹操割鬚脱袍(曹操 鬚を割りて袍を脱ぐ)	74
張松(ちょうしょう)	75
張松舌戦楊修(張 ちょうしょう 松 ようしゅう 楊修と舌戦す)	76
馬超(ばちょう)	77
張飛夜戦馬超(張飛 馬超と夜戦す)	78
孫尚香投江(孫 そんしょうこう 尚香 江に投ず)	80
單刀赴会(單刀で会に赴く)	81
張遼威鎮逍遙津(張遼の威 しょうようづ 逍遙津を鎮める)	82
甘寧百騎劫魏營(甘寧 かんねい 百騎で魏營を劫う)	83
張飛智取瓦口隘(張飛 がこうあい 瓦口隘を智取す)	84
蔡琰(さいえん)	85
刮骨掠毒(骨を刮り毒を掠める)	86
曹植賦詩(曹植 詩を賦す)	87
陸遜火攻破連營(陸遜 火攻めで連營を破る)	88
孔明七擒孟獲(孔明 七たび孟獲を擒える)	89
司馬懿仲達(しばい・ちゅうたつ)	90
孔明計収姜維(孔明計りて姜維を収める)	91
空城(くうじょう)の計	92
揮淚斬馬謖(涙を揮って馬謖を斬る)	93
奔劍閣張郃亡身(劍閣に奔り張 ちようこう 郃身を亡す)	94
孔明坐車(孔明車に坐す)	95
黄鶴樓(こうかくろう)	96
関雲長夜読春秋(関雲長 夜に春秋を読む)	98
年画作品集	99
三国志と京劇	110
三国志資料	113
前出師の表	114
風雨竹	124
あとがき	126

本書の刊行に寄せて

河北大学中国文学部教授
中国屈原学会常務副会長

魏 際 昌

1991年の新年早々に、殷占堂さんは日本テレビ界の友人たちを案内して帰国され、「中国のスポーツはなぜ強いのか」というテレビのスペシャル番組制作に取り組まれておられました。そのお仕事で忙しいなかをわざわざ私をお訪ねくださり、旧交を温めることができました。

私と殷さんとの出会いは、かつての文化大革命の頃にさかのぼります。「反動権威」のかけ声のもと、私は従来の仕事とは一変して、河北大学中国文学系の図書館で掃除と雑務に従事するという、肉体的にも精神的にも苦痛を味わっておりました。このような悲惨な状況の中で、私は殷さんと知り合ったのです。勉強好きで思いやりの深い殷さんは、心身ともに疲れ果てた私を煤けた拙宅に訪ねてこられ、いろいろとおもしろい話をきかせてくれて私を慰めてくれました。私は専門の古文や唐詩・宋詩などについてお話致しました。それ以来、私と殷さんは、中国の言葉でいう「忘年の交」の間柄、つまり年齢を忘れた友人のお付き合いをするようになったのです。

殷さんは、日本に渡られてから既に5年になります。日本に住まわれた当初は、日本語がまったくわからず、とても苦勞されたそうです。その苦勞の甲斐あって、今ではテレビの番組や教育ビデオの制作の傍ら、単行本の企画編集までもこなす活躍ぶりです。また、日中友好の架け橋についてもたいへん努力され、関係者から賛辞が寄せられています。

さて、新年早々に訪れられた際に、私は殷さんから一つの仕事を頼まれました。今回上梓される『三国志人物絵巻』に序文を書いてほしいというのです。そして、掲載される作品の写真を見せてもらいました。私もよく知っている有名な水墨画家劉生展さんの作品です。劉さんの作品にはすばらしい馬の絵が多く、三国志人物の水墨画には最適の方だと思います。私も『三国志』は大好きで、先般「漫話・三国志演義における桃園兄弟」なる論文を書いたところです。そんな事情からお引受けすることに致しました。

『三国志演義』は羅貫中が歴史書『三国志』（陳寿著）から創作した歴史小説で、『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』とともに明の時代の四大奇書といわれています。なかでも『三国志演義』は、中国の人民にたいへん愛読されているばかりでなく、世界の人々、とりわけ日本の人々にはよく読まれていると聞きます。

これまで三国志ブームが何度となく起こり、日本では『三国志』『三国志演義』ともに数々の出版社から全訳版、縮訳版、故事、事典、絵本などが出版されており、さらにはアニメなども製作されていると聞き及びます。これだけ三国志が愛される背景にはそれなりの理由があるのでしょう。私なりに考えてみますと、

1. 日中両国人民の友好と文化の交流には、二千年余の歴史があります。さらに、中国の伝統文化は日本文化の源であり、日本の年輩の人たちの中には中国の伝統文化をたいへん愛好している人々がたくさんいることです。私の日本の友人にも漢学に造詣が深く、中国の古典文学、例えば先秦散文楚辞、唐詩、宋詩、元曲、明清の小説などを深く研究され、中国人以上に理解されている方もおられるほどです。私も国際学会などで言葉は通じなくても「筆談」で話し合ったことがあります。

2. 『三国志演義』は数えきれない登場人物と複雑にからみあった物語で、そこには現代に生きる人たちに多くのことを示唆してくれる内容が豊富に包含されていることです。政治学、外交学、戦略戦術学、人材学、倫理学などが含まれているのです。日本では経済の急速な発展のなかで企業間の競争は激しく、生き延びるためには戦略戦術の研究、人材の発掘育成、適材適所への配置などいろいろと研究しなければなりません。このような時代の状況は、日本だけでなく世界的にも、まさに三国の戦乱の状況とよく似ていると思います。したがって、『三国志』や『三国志演義』は現代社会の優れた参考書といわれるゆえんです。

殷さんはこのような現代の状況をよく把握され、好機を捉えて出版の企画を立てられたものと感服します。また、それに応えて発行に踏み切られた㈱MPC社長の決断も喜ばしいことです。

本書に収録された作品はすべて、小写意(訳注：簡潔大胆な筆致の中に意図を伝える表現法)水墨画ですが、筆致はあくまで簡潔で意味深く、また淋漓としてその神髄を表しています。まさに劉生展ならではの表現で、日本だけでなく世界の人々に感銘を与える作品集であると確信しています。

劉生展さんは殷占堂さんと同郷で、二人は古くからの親友です。劉さんは草原の生まれで草原で育ち、大自然の中で何十年もの間、馬を題材にした作品や三国志の年画(訳注：中国で新年に各戸に飾る絵)を描き続けてきた有名な画家です。彼は、幼

少の頃から『三国志』の人物と故事に魅せられ、成長するとともに深く研究され、人物の個性の表現に努力されてきました。その努力の甲斐あって、各登場人物がみごとに活写されています。特に、力強く表現された英雄人物像の運筆運墨は精練にして大胆活発、劉生展の特長を余すところなく発揮しています。

水墨画による三国志の人物表現は、日本においても中国においても、初めての試みかと思います。伝統ある水墨画の技法で伝統的な文学作品を表現することは誠に意義深いものを感じます。日本には百万余の水墨画の愛好者がおり、水墨画の習熟に努力されていると聞きます。本書が良き参考書となることはもちろんのこと、また、『三国志』を愛する広範な読者の方にも、本書は劉備、関羽、張飛、孔明、趙雲、曹操などの英雄人物像の鮮明な印象が得られる絵本として楽しんでいただけるものであり、同時に日中文化交流のためにも意味深いものと確信致します。

この拙文を書くに当たり、殷さんからは特急で書くようにとの依頼で、のんびりした生活に慣れた86歳の老体には些か骨が折れました。たぶん、意を尽くせぬ乱文になっているかと思いますが、日本の読者のみなさんにはなにとぞご容赦願います。

最後に一つ補足させていただきたいことは、『三国志』は史書であり、『三国志演義』は歴史小説です。日本では両方を混同して「三国志」と呼んでいるようですが、これはやはりはっきりと分けたほうがよいと思います。

1991年1月古城保定にて

(訳：明石昭彦)

三国志人物繪卷





黄巾起義



黄巾起義(黄巾、義に起つ)

「天下の大勢は分かれて久しければ必ず合し、合して久しければ必ず分かる。周の末、中国は七つの国に分かれて争い、みな秦に併合された。秦が減びると、楚と漢に分かれて争ったが、またも併合されて漢となる……」の書き出して始まる三国志演義は、後漢の献帝の時代に、宦官が権力をほしいままにし、朝政は乱れて悪くなり、人民は乱を願い、盗賊は各地に蜂のごとく群がり起こる時代状況であった。そこに起こったのが黄巾の乱である。

黄巾とは、乱徒が頭に巻いた黄色の頭巾のことである。黄巾の指導者は張角、張宝、張梁の三兄弟。なかでも、張角は国家試験の秀才の資格までもとりながら、その上の資格はついに取れなかった男で、山に薬草取りに行ったある日、青い目の童顔の仙人に出会う。仙人は『太平要術』三卷を張角に授け、「天に代わって教化を広め、あまねく世の人々を救済せよ。悪心を起こせば必ず天罰が下るであろう」と言いおいて、一陣の清風となって消え



失せる。

『太平要術』を手にした張角は日夜勉強に励み、やがて風雨を呼び起こす力を身につけ、太平道人と名乗る。中平元(西暦184)年疫病が流行すると、張角はお札や霊水を授けて疫病をなおし、これよりみずから「大賢良師」と称することになる。これ以後、教化を広め、信者を増やしていく。そして、人心をつかみ、天公將軍となって蜂起し、官軍を苦しめることになる。

